

佐佐木信綱の「新た世」の歴史観

——戦争期と戦後を繋いだ論理 付、「日本叢書」一覽——

小松 靖彦

一 戦争期・戦後間の〈切断Ⅱ連続〉

日本は第二次世界大戦敗戦後の占領下に、社会制度の大規模な改変が行われ、政治体制も大日本帝国憲法下の立憲民主制から日本国憲法下の国民主権の象徴天皇制へと移行した。しかし、連合国軍が本土に侵攻し、戦争指導者の死で終わったドイツ・イタリアと異なり、政治制度が変わったとはいえず天皇制自体は存続し、また行政についても、戦争期の担い手たちの多くが引き続き担当した。日本の国家としてのありようは、戦争期と戦後との間で、〈切断〉と〈連続〉の両面を見せる。両者の複雑な絡み合いは、坪井秀人のように〈切断Ⅱ連続〉と表現するのが適切であろう。¹⁾

その中であって、戦時中に弾圧を受けた宮本百合子・渡辺順

三らのような知識人は、それぞれの分野で、戦後に急進的民主主義運動を主導し、〈切断〉を推進した。

一方、弾圧を受けた知識人でありながら、戦後に、戦争下に喧伝された「日本精神」をキリスト教の立場から解釈し直しつつ、天皇中心の「平和国家論」を展開し、簡単に「民主主義」に靡く日本人の主体性のなさを批判した矢内原忠雄や、日本人の五世紀以来の皇室への敬愛の情を〈歴史的事実〉として、天皇の存在と「民主主義」は一致すると説いて、急進的歴史学者たちを驚かせた津田左右吉もいた。弾圧は受けなかったが、小説の登場人物の口を借りて、真の勇氣ある自由思想家は、昨日の「軍閥官僚」を罵倒するのではなく、「天皇陛下萬歳！」と叫ぶべきだと主張した太宰治もこのグループに加えてよいであろう。今日から見れば、彼らの主張は時代錯誤的である。しか

し、彼らの立場は戦争期と戦後の間で一貫している⁽⁵⁾。敗戦後の「民主主義」の流行と天皇批判の高まりに抗して、主体的に〈連続〉の立場を選び取ったのである。

一方、戦争の遂行に協力した大多数の知識人は、敗戦後にいとも容易に民主主義者へと「転向」していった。「国文学者」について言えば、藤村作のような国文学界の指導者たちは、戦争下には「日本精神」の宣揚を自らの使命としたが、戦後には、自分たちは「軍国主義」に加担していたわけではないと言い、民主主義・自由主義に基づく「道義日本、平和日本、文化日本の新建設」に努めることを誓った⁽⁶⁾。

外から見るとすれば、これは無責任な「転向」でしかない。しかし、「国文学者」たちは、意識の上では一貫していた。彼らは「臣民」として、「自存自衛」「東亜永遠ノ平和」のための開戦を宣言する「開戦の詔書」と、「総力ヲ将来ノ建設ニ傾ケ」「国体ノ精華」を発揚し、世界の進歩に遅れぬよう命じた「終戦の詔書」にあくまでも〈誠実〉に応えようとしたのである。彼らの行動を決めるものは天皇の意志であった。このような「国文学者」たちは、まさに戦争期と戦後の〈切断≡連続〉を体現したのである。

この〈切断≡連続〉を最も際やかに生きた知識人の一人が佐佐木信綱であった。信綱は「国文学界」の重鎮であっただけでなく、歌人として歌壇の指導的地位も得ていたため、戦争期にも戦後にも発信する機会に恵まれ、その影響力も大きかった。

戦争下、信綱はラジオ・新聞・雑誌・書籍を通じて、戦意高揚のための活動を旺盛に行った。敗戦後は、戦争に協力した知識人として疎外され、短歌の弟子たちの間でも信綱の弟子と言わないほうがよいという風潮が広がったが、早くも一九四五年（昭和二十）十一月には「新日本建設」に勤しむ若人のために歌集『黎明』（八雲書店）を刊行し、「平和日本の新建設」のための活動をラジオ・新聞・雑誌・書籍によって強力に展開した。

このような信綱の「転向」の基底にあるものについては、佐佐木幸綱の「皇室の歴史を展開して来た短歌。その短歌をおのれのゆくべき〈道〉と自覚」していたという戦争期の信綱の活動に関する説明や、大野道夫の、天皇そして国家と強く結び付いた「愛づる明治の精神」の発現とする捉え方が有効である。信綱は戦争期・戦後を通じて、「明治の聖代に生を享くる」者として、一貫して天皇への篤い忠義心を持ち続けた。森本平が言うように、「戦争という『国難』を天皇のもとで頑張ってきたように、これからの『復興』という『国難』も天皇のもとで頑張っていこうという思い⁽⁷⁾」であったのである。

さらに、私はそれに止まらず、皇室、および皇室と国民の結び付きは再生・更新されながら継続する⁽⁸⁾。という「新た世」の歴史観を信綱が明確に持っていたことが、戦争期から戦後を生き抜く、強朝とさえ言える心的ありようを支えたと考えられる。本稿は、敗戦前後の信綱の歌人としての活動と、一九四六年に「日本叢書」（生活社）として刊行された鑑賞書『萬葉集より』一統

萬葉集より』によって、この「新た世」の歴史観を検討し、戦争期と戦後の（切断＝連続）の解明のための材料を提示するものである。

二 本稿の立場

論に先立ち、本稿における私の立場を明確にしておきたい。

本稿は信綱を戦争遂行に加担した知識人と捉えることを前提とする。戦争期と戦後を連続させた信綱の論理を明らかにするが、それは信綱を擁護するためのものではない。しかし、単純に戦争加担者と告発する立場も採らない。門人の石樽正、藤田徳太郎の戦災による死に対する「いたましいともいたましい」（『作歌八十二年』毎日新聞社、一九五九）という嘆きの深さは、戦争加担者という側面だけでは捉え切れない。

そこで、本稿では、戦争下で愛国詩を作った前衛詩人・北園克衛についてジョン・ソルトが用いた、一日一日、あるいは一月一月の活動を明らかにして評価するという方法に依拠する。具体的には、『心の花』第48巻第1号（二九四四・二）から第50巻第12号（一九四六・二）を基本資料として、そこにラジオ・新聞・雑誌・書籍などからの情報を加えて私に作成した、一九四三年十二月から一九四六年十二月まで、すなわち一九四五年八月十五日の「終戦の詔書」宣布前後の約三年間に絞った信綱の活動年表（以下、「年表」）を基に、戦争期と戦後を繋いだ信綱の論理を明らかにする。

また、信綱は歌人と「国文学者」の両面を持つ。先行研究では、戦争下における信綱の研究者としての姿勢や業績は、戦争遂行への加担と切り離して評価する傾向が強い。しかし、次の戦争期と戦後の歌に注目したい。

《戦争期》

(1) 『心の花』第48巻第4号、一九四四・四（作者名略。以下同）

萬葉一千種解題

を整理しつつ

ますらをが戦の場にたつごとき心もて今日も文机による
ひた心書にひたりぬし眼を放ち見やる外の面は雪ふぶきを
り

庭木立枝たわわにも雪つもれり北の防人を思ひかしこむ

(2) 『心の花』第48巻第8号、一九四四・八

日記より

家人は鎌倉に疎開しつれど余は東京にして

著述に専念しつつあり

み軍人戦の場に在ることとき心もて日々に筆とり暮らす

《戦後》

(3) 『作歌八十二年』の一九四五年八月十五日―十七日条（二九九

頁）

著作にいそしみつつ、

民国のためささげまつらむ老の身に残る血汐の一しづく

をも『黎明』『山と水』に収録]

(4) 『作歌八十二年』の一九四六年四月条(三〇二頁)

終日著作の筆をとつて、

かへりみて今日の一日に悔あらずあらむ限の力つくしし
(1)は戦場の軍人とともに戦う意識で、「萬葉一千種解題」に
取り組んでいることを詠む。(2)も同様で、「著述」は、『萬葉
五十年』(八雲書店、一九四四・六)を始め、この頃に立て続けに出
版される「国文学」の学術書を指す。(3)は「終戦の詔書」の宣
布直後の歌で、「著作」によつて「国」に尽くす決意を新たに
している。この「著作」は靈元天皇『乙夜隨筆』の解説(大八
洲出版、一九四六・二)などであろう。(4)にも(3)の意識が引き継が
れている。「著作」は『上代歌謡の研究』(人文書院、
一九四六・一〇)などの学術書である。

これらの歌からは、信綱は「国民」「臣民」と言った方が相応し
いかの一人として、戦争下も敗戦後も強い危機感と使命感を
もつて研究に勤しんだことがわかる。それゆえ、信綱の研究活
動も時代の中で捉えなければならぬ。また、信綱における(切
断≡連続)を考察するためには、歌人としての活動と研究者と
しての活動をトータルに捉えることが重要となる。

そして、信綱の戦争期と戦後を繋いだ論理を説明する本稿の
最終目的は、今の時代を生きる私たちのための歴史的教訓を得
ることにある。信綱の「新世」の歴史観の問題点はどこにあつ
たのか――。

三 学徒出陣と敗戦後の日本再建

信綱の「年表」を辿つてゆくと衝撃的な作品に出合う(傍線
は引用者。以下同)。

《戦争期》『心の花』第48巻第1号、一九四四・一

出陣学徒におくる

ひむがしの大きき大亜細亜の黎明に雄々しく立てる若人を見
よ

《戦後》『黎明』八雲書店、一九四五・一一

若人に示す

今あらたに興る皇国の黎明に雄々しく立たむ若人を見よ
驚いたことに、一九四三年(昭和十八)十二月一日の学徒出陣
の際の讃歌が、歌句の一部を変えて、敗戦後の「新日本建設」
のために立ち上がる若者の讃歌に転用されているのである。し
かも二首目は『黎明』の巻末歌で、歌集名の由来となる重要な
歌である。

信綱は戦争下に詠んだ「愛国短歌」(愛国の情熱や殉国の至誠を
詠む典型的な短歌)において、同じ表現を繰り返して用いており、
歌句を転用することは、今日の私たちが考えるよりもハードル
が低かった可能性がある。一首目は『心の花』では五首からな
る「出陣学徒におくる」の冒頭歌であるが、一九四三年十二月
一日付の「朝日新聞(東京版・大阪版)朝刊、「読売新聞」朝
刊の「出陣学徒におくる」には含まれていない。『心の花』の

外では知られていなかったため転用しやすかったということも考えられる。

とはいえ、この二首は敗戦を挟んでおり、日本再建を歌う二首目を「愛国短歌」風によむ必要はなかったはずである。それゆえ、信綱にとっては学徒出陣も「新日本建設」も同質のものであったと考えざるを得ない。

そのような目で見直すと、「若人に示す」の他の歌についても、例えばその三首目を、

よ
ひむがしの大き大亜細亜の黎明に雄々しく立てる若人を見

大いなる歴史の中の一人としいゆく若人よ今ぞ此秋ぞ

新たしき日本の国やまとをつくり成さむ一人一人ぞ雄々しく正しく

と「出陣学徒におくる」と並べても大きな違和感はない（右の三首目が「若人に示す」の三首目）。

なぜ信綱は学徒出陣と「新日本建設」を同質と捉えたのであろうか。その手懸かりは二首目の「今あらたに興る皇国」という表現にある。この表現の意味するところは、これより後の信綱の歌によって理解することができる。『心の花』第50巻第12号（一九四六・一二）に次のような歌がある。

日本国憲法発布の日に

今ゆ後国てふ国の範のりとならむ法のりここ生るよき日今日の日
新た世とうづなはしつつか聞きかしまさむ聖徳みことの太子明治の帝

新たしき法の花さく浦安の名に負ふ国の法の花さく

白菊を黄菊をいけて新た世の法の花さく今日をことほぐ

これらは一九四六年十一月三日の日本国憲法の公布を「新た世」の到来と言祝ぐ歌である。右の二首目によれば、その「新た世」とは、過去の歴史と断絶したのではなく、聖徳太子の十七条憲法、明治天皇の大日本帝国憲法からの連続性の中で、今、今上天皇（昭和天皇）の日本国憲法によって再生・更新された「世」を意味している。

この「新た世」の内実を知ることのできる材料が、後に書かれたものではあるが『作歌八十二年』の一九四六年十月の条にある。次年度の歌御会始詠進歌選者に選ばれ、皇居で天皇・皇后に拝謁した折、天皇から「歌道をとおして、皇室と国民との結びつきに就いて、一層努力するように」との言葉を賜り、これを歌壇全体への言葉として感激して承ったことを記す。そして、以下のように言う。

「……かくも深く歌の道に寄せさせ給う大御心に応え奉つて、全歌壇の人々の詠進を待望する。萬葉集の歌に、「新た世」という詞がある。今や日本国憲法も制定せられ、我等はまさしく新た世のあけぼのに立とうとしておるのであって、ここに「あけぼの」の御題を御示しになったことは、まことに意義の深いものがあることを覚える。新た世のために、新たなる歌のために、重ねて、全歌壇の人々の詠進を待望する次第である。」

（三〇四頁）

この記述によれば、信綱の「新た世」とは、皇室と国民の結び付きの永続性、そしてその当然の前提である皇室の永続性の再生・更新を意味している。すなわち、信綱は、皇室、および皇室と国民の結び付きは再生・更新されながら永続する、という歴史観を持っていたのである。

信綱は日本国憲法制定によって、この歴史観を『萬葉集』に見える「新た世」という言葉(巻一・五〇等)で表現したが、『黎明』の「今あらたに興る皇国」もそのような歴史観に基くものであり、再生・更新し永続する皇国(天皇の治める国)を意味していると思われる。そうであるからこそ、同じ「若人に示す」と題された歌で、

明治の御代興れりし時を思ひ見よ若人にして国を背おひきと「明治の御代」が思い起こされるのである。信綱にとつて敗戦後の復興は、明治維新の反復・更新であった。

一方、「出陣学徒におくる」歌には、「ひむがしの大き大亜細亜」とある。その意味するところは、信綱が著者代表となつている「歌集新日本頌」(八雲書林、一九四二)からわかる。

その「序」において、信綱は「昭和十六年十二月八日、全世界に於きて最も古く長く尊き歴史を積み、また永へに窮なき將來を持たる吾が日本は、畏き大御稜威により、新たしき日本として生れたりといひつべし」と記し、「大東亜戦争」(太平洋戦争)の開戦を「新日本」の誕生と捉えている。この意識は『歌集新

日本頌』に歌を寄せた歌人たちにも共通するが、信綱はとりわけこれを強く意識していた。窪田空穂・斎藤茂吉の「序」は、信綱の「序」のような高い調子で「新日本」の誕生を謳い上げていないのである。

また、「青雲」と題した自作三四首の中には次のような歌も収められている。

新あじあ興させますと邦きよむる神ごころなり神御業なり

(一〇頁)

現つ御神神の慮に新たしき亜細亜の歴史創らせたまふ

(一二頁)

配列によれば、一首目は「支那事変」(日中戦争)下、二首目は「大東亜戦争」開戦後の歌である。信綱は日中戦争・太平洋戦争を天皇による新たなアジアの建設事業と見ているが、これは「開戦の詔書」に素朴なまでに忠実な戦争観である。

「ひむがしの大き大亜細亜の黎明」も、天皇による新たなアジアの始まりを意味している。「出陣学徒におくる」と題された歌には、

大いなる歴史の中の一人としいゆく若人よ今ぞ此秋ぞ

という一首もあるように、信綱は学徒出陣を、新日本、新しいアジア——戦後の言葉を使えば「新た世」——を生み出す英雄的行為と讃美したのである。

「新た世」の歴史観に立つとき、学徒出陣と戦後の若人によ

る日本再建は決定的に異なるものではなく、むしろ同じ歴史的意味を担う出来事となるのである。

四 『萬葉集より』『続萬葉集より』の「序言」

信綱が敗戦後最初に出版した「国文学」書は、複製・解説を除くと、「日本叢書」(生活社)の一九四六年(昭和二十一年)発行の『萬葉集より』(四月)と『続萬葉集より』(六月)である(図1)。ともにB6判、中綴じ並製本(ホチキス一か所留め。但し、背から約六ミリメートルのところ、本紙を綴じ、それに表表紙・裏表紙となる一枚を糊付け)、色刷の紙の表紙(朱の飾り枠(角子持ち罫)内に黒で書名等を印刷)、三二頁、表表紙裏に「日本叢書」の趣旨、裏表紙裏に既刊の「日本叢書」の書名・著者名の一覧を印刷する。

『続萬葉集より』の「序言」(本稿末尾の〔資料2〕)からは、当初より『萬葉集』全体からの抄出と評釈が企図されており、分量の都合で二冊としたことがわかる。『萬葉集より』は『萬葉集』巻一から巻九(四五首)まで、『続萬葉集より』は同巻十から巻二十までの歌(五一首)を収める(全九六首)。

極めて簡素な小冊子であるが、この二冊の出版に信綱が並々ならぬ意欲を持っていたことが、『心の花』第50巻第6号(一九四六〇)の記事「竹柏園主の近著に就いて」(署名なし)から窺える。

歌集『黎明』は、近作及び従来の作品中より、現代人の読

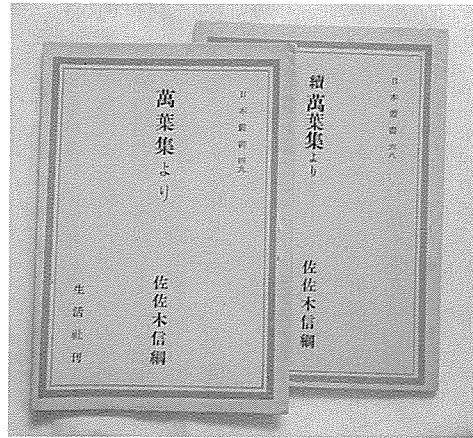


図1

誦すべき明朗なるを自選されたもの。

『萬葉集より』は、集中の秀歌と当時の文化的現象の資料たる歌を選び、評釈を加へられたもの。共に極めて薄き冊子なるも、園主が晩年の精神をこめら

れたる書、同人にて希望の方は、竹柏会に申込まれたし。このような強い意欲のもと、『萬葉集より』『続萬葉集より』で信綱は「新たな世」の歴史観を『萬葉集』の「評釈」という形で具体化し、深化させている。逆に言えば、信綱における(切断)連続の問題が特に先鋭的に表れているのがこの二冊なのである。それを、①「序言」、②「評釈」の実際、③二冊が含まれる「日本叢書」、の順で検討したい。

『萬葉集より』の「序言」(資料1)は九つのパラグラフからなり、(1)〜(4)で『萬葉集』の歴史的意義、(5)〜(7)で採歌方針、

(8)で「評釈」の方針、(9)で出版の意図を説明している。

まず、(1)～(4)の説明が、戦争期における『萬葉集』の捉え方を出るものではないことを指摘したい。エジプト・ギリシア・インド・中国と比べると後発ではあるが、日本が優れた文化を持ち、その現れが『萬葉集』であるという(1)は、『萬葉集概説』(一) 萬葉集の解題とその研究の興味、四頁、明治書院、一九三七・一二)を踏襲したものである。「萬葉集は、世界の文芸史の上にも、優秀なる古典の一である」という説明は、一九三〇年代からの「世界文学」として『萬葉集』の卓越性を説く論潮⁽²⁾と重なる。

『萬葉集』が「国家的に十分目覚めた時代」の精神性を説く(2)は、『萬葉読本』(日本評論社、一九三五・一〇)の「一、序論」の文章の一部(三～四頁)を、語句の一部を変えて転用したものである。「その感情の至純、気格の悠揚、知覚の顕敏、道義的觀念の敦厚さ」という『萬葉集』の特徴を説明する言葉は全く同じである。但し、「成長しつづあつた純朴な国民」を「この国土にはくくまれた純樸な民族」(傍点は引用者。以下同)に、「真の意味の建設の第一歩を踏みだした頃の国民精神」を「国家的に十分目覚めた時代の精神生活」に改め、「民族性」と〈国家的意識〉を強調している。⁽³⁾

(4)では「萬葉精神」の根幹が「まこと」にあり、それが後の「みやび」などの起源となったと言いが、これは久松潜一が一九二〇年代後半に論理化し、日中戦争・太平洋戦争下に強化していった「国文学の精神」論を踏まえている。⁽⁴⁾

次に採歌方針であるが、(5)については、後に検討する。注目したいのは(6)である。愛国精神の昂揚のために日本文学報国会によって選定され(信綱は選定委員)、一九四二年十一月二十日に新聞発表された「愛国百人一首」所収の『萬葉集』の「秀歌」は一首を除いて採用しないと言う。すなわち、『萬葉集より』『続萬葉集より』は「愛国百人一首」を前提とした著作なのである。

但し、両者の〈連続〉性は単純なものではない。連合国軍最高司令官総司令部(GHQ)は一九四五年九月にプレスコードを發布し、メディアに対する統制を開始していた。それゆえ、関連する出版物が統制の対象となる恐れのある「愛国百人一首」との関係を目に見える形で〈切断〉することによって、発表を免れようとした可能性がある。同時に読者の「愛国百人一首」の記憶によって、『萬葉集より』『続萬葉集より』がこれと〈連続〉することも期待されると見られる。(6)には〈切断〉による〈連続〉の意図が隠されている。

このように「序言」の(1)～(8)は、(5)を除き戦争期との〈連続〉性が強い。これを戦争期の『萬葉集』の「評釈」書の序文としても不自然ではない。その上で、最後のパラグラフ(9)で、戦後という状況を反映した、「今や吾等は、新たななる日本を建設し、新たななる日本文化を創造すべく、一刻も忽せにすべからざる時に直面してある」という時代認識が示され、祖国のために「正しき道」に精進する若人の心の糧、古典研究を志す人の道しるべとしたという出版の意図が述べられる。

この時代認識は前節で見た「新た世」の歴史観に基づくものである。永統する日本の歴史「序言」では天皇に触れないが、「評釈」には天皇への忠義心が潜められている。後述を、『萬葉集』によつて再生・更新することがめざされているのである。それはまた、戦争期以来変わらざる萬葉観を、「新日本建設」のために再生・更新することでもある。

ではどのように再生・更新するのか。それを具体的に示すのが⑤である。①「永遠の生命ある、古くて新しい歌」と、②「文化的現象を了解する資料」となる歌とを集め評釈することによつてである。①は、直前に「今日の吾々の魂を揺り、胸うつものが多い」とあるように、まず「千年以上の時を超えて戦後の人々の心をダイレクトに感動させる歌」である。加えて、『続萬葉集より』の「序言」(「資料2」)の「その後の歌壇に、常に新しい生命の力を灌いで来、今日の我々に尽きぬ興味を汲ましめてをる」とあるように、(後代に強い影響力を持った歌)もこれに含まれる。どちらの歌にしても、信綱は『萬葉集』の歌の「更新による永続性」を提示することによつて、日本の再生・更新を果たそうとしている。

②については、「序言」に説明がなく、その意図は明らかではない。「日本叢書」というシリーズ全体を見渡すことで、それを推測することができるため、後節で改めて論じたい。

五 『萬葉集』の歌の〈更新による永続性〉

『萬葉集より』『続萬葉集より』に取り上げられた『萬葉集』の歌九六首のうち七九首は『増訂萬葉集選釈』(明治書院、一九二六・三)と重なっている。しかも、それらの歌の「評釈」は、『増訂萬葉集選釈』の転用である。その典型が、中大兄の巻一・一五番歌である。

わたつみの豊旗雲に入日さし今宵の月夜清明こそ

皇子の御頃、播磨国にもせられ、印南野の海浜に立ち給うての御作と考へられる。

海上はるかに棚引いてをるうつくしい旗のやうな雲に、夕日の光が映えてゐる。今夜の月はきつと明らかであらう。海の果なる夕ばえの雲の美しさに、今宵の月のさやかならむことを詠み給うたのである。

「わたつみの豊旗雲に入日さし」と、華麗な大自然の景を、莊重な調にうたひあげ給うたのは、作者の御人がらも思はれる。

*【増訂萬葉集選釈】(全文)

わたつみの豊旗雲に入日さし今夜の月夜さやにてりこそ
前の長歌及反歌の次にあるので、同じく印南の海辺でお詠みになつた御歌であらうと思はれる。第五句の訓は、今案による。

海上はるかにたなびき渡つてをる壯麗な旗雲に、入日の

光がさしてゐる。今夜の月よ、さやかに照らせよかしと、海上暮雲に夕陽の映ずる美しさを見ながら、その夜の月明を希ひ給うたのである。「わたつ海の豊旗雲に入日さし」の壮大な景色は、後世萬葉以外には認められぬ趣味である。

(一三—一四頁)

傍線を付した作歌事情、歌の意味と解釈についての文章は基本的に同じである。ここまで一致している例は少ないが、ほとんどの場合『増訂萬葉集選釈』に依拠している。

執筆期間が短かつたためとも思われるが、それだけではなく、信綱が『増訂萬葉集選釈』に大きな加筆修正を施す必要を感じなかつたためであろう。しかし、その小さな加筆修正に注目すると、『萬葉集より』『続萬葉集より』の「評釈」の特徴が浮かび上がってくる。

以下、二つのポイントに絞って、『増訂萬葉集選釈』と比較しつつ、『萬葉集より』『続萬葉集より』の「評釈」の特徴を見てみたい。

その第一は、「序言」の①の歌について、その「生命の力」を「評釈」において具体的に説明しようとしていることである。まず、①『萬葉集』の歌が影響を与えた作品や内容が類似する作品にしばしば意識的に言及していることが注目される。山上憶良の卷三・三三七番歌の「評釈」がその例である。

憶良らは今はまからむ子泣くらむその彼の母も吾を待つらむぞ

(最後のバラグラフ)

附記。馬琴の八犬伝に、「いざ罷るべし、子泣くらん、その子の母も俟つらんぞ、急ぎ給へ」云々の句がある。馬琴もおもしろいと感じて引いたのであらう。

(『萬葉集より』一五—一六頁)

歌の意味、制作事情の説明は、『増訂萬葉集選釈』を基本的に踏襲している。しかし、この馬琴の『八犬伝』についての記述は全く新たに付け加えられたものである。『続萬葉集より』の「序言」の言う(後代に強い影響力を持った歌)の影響力を具体的に示すことに努めていることが窺える。

また、②その歌が現代人を感動させる「生命」を持つことを明言したところが何箇所かある。『増訂萬葉集選釈』にはそのような言葉は見えない。田口益人の卷三・二九六番歌の「評釈」は次のようである。

庵原の清見が崎の三保の浦のゆたけき見つつ物思もなし
「…」今日、清水市なる龍華寺あたりに立つて、千数百年
前の萬葉人の此の歌を誦したならば、何人も、詩歌の生命
の新たなるを感じざるを得ないであらう。「…」

(『萬葉集より』一三頁)

*【増訂萬葉集選釈】(歌は省略)

「…」東海道の汽車の旅路に、最も旅客の心を慰さましむる景色の一つは、たしかに興津あたりの眺めである。こは何人もしか感ずるところであらう。しかも「ゆたけき見つ、

物思もなし」の真趣は、果して今の汽車旅行の旅人の之を解し得る所であらうか。〔…〕
(二〇五頁)

『増訂萬葉集選釈』では、現代の旅人も二九六番歌のように三保の浦に感動するが、益人の歌の境地はわからないとしたのに対して、『萬葉集より』では、現地でこの歌を誦すると「詩歌の生命の新たなる」を感じると言う。

言葉足らずでややわかりにくいのが、その意味するところは、大伴家持の巻十九・四二九〇番歌の「評釈」によって諒解できる(全文)。

春の野に霞たなびきうらがなし此の夕かけに鶯なくも野辺には、霞がたなびいて、そこはかとなき哀愁をおほえる。時は恰も夕ぐれ、入方の日影のほのかな光に、鶯が鳴いてをる。

淡い哀愁のやるせなさを巧みに糸がき出して、読む者をその情趣の中に誘ひこむ魅力を持つてをる。春愁といふ語を以てしてもなほ尽くさぬこの感情は、なごやかな日本の春景色のめぐつてくることに、人の胸に蘇つて来て、それと共にこの歌が新しく思ひかへされるのであらう。日本の国土と共に、永遠に新しく、不朽の生命をもつものといふべきであらう。

家持の歌風の円熟を認むべきと共に、素朴な萬葉歌風に、優婉精緻にその感情を表現する新生面が開かれたのである。

「うらがなし」の「うら」は、心のうちの意。うらさびし、

うらぐはしなど用ゐてゐる。

(『続萬葉集より』二四―二五頁)

*『増訂萬葉集選釈』(歌は省略)

春興に乗じて詠んだ家持の作。「うらがなし」は霞みこめた春の景色に対して、心のうちが何となく物あはれななつかしい思を覚える、といふほどの意である。即ち一首の意は、春の野にうら／＼と霞がたなびいて、景色の面白いのに、折から夕日の薄らかにさす方に鶯の声がするも、あはれふかい春の興かな、の意。霞の朧々たる中に、何となき哀愁のこもつた春景色が、興ふかく感ぜられる。佳作といふべきである。
(四三九頁)

この歌の「評釈」では、「うらがなし」の語意と歌の意味の説明以外は、『増訂萬葉集選釈』に大きく加筆修正している。春が到来すると「春愁」を感じ、その度ごとにこの歌に新たな感動を覚えるであろうと記す。つまり、信綱の言う「詩歌の生命」とは、季節が巡り来る度、あるいは歌に詠まれた土地を訪れる度、その歌が新たな感動を呼び起こすということである。唐突に出てくるように見える「日本の国土と共に、永遠に新しく、不朽の生命をもつ」という言葉も、日本の国土(＝季節・土地)のように、『萬葉集』の歌も永遠に新しい感動を与え続けることを言うのであらう。

さらに家持の「新生面」も指摘されている。家持の巻十九・四二九二番歌、

うらうらに照れる春日に雲雀あがりこころ悲しも一人しおもへば

についても「春愁を詠じて永遠に新しく、家持の、詩を求めて常に若い心の思はれる作である」(『続萬葉集より』二五頁)とあり、信綱の言う(新しさ)には、新しい詩を生み出す詩人の若々しい心も含まれている。

以上、①・②のような(更新による永続性)という信綱の『萬葉集』の捉え方は、「新た世」の歴史観と同じ構造を持つものであり、しかもその(永続性)をより深い感情の次元で実現しようとするものである。『萬葉集より』『続萬葉集より』ではしばしば、「増補萬葉集選釈」の「評釈」に「深いあはれ」「哀情深い」「情の切迫」などの評語が加筆されているが、信綱はまさに今新たに呼び起こされる感動を直截的に伝えようとしたのであろう。

六 (尽忠愛國) のカモフラージュ

『萬葉集より』『続萬葉集より』の「評釈」の第二の特徴は、天皇への忠義心が見え隠れしていることである。

まず、微細なことであるが、①天皇(天智天皇(中大兄)・聖武天皇)に対する尊敬表現が、『増訂萬葉集選釈』より手厚いものとなっている。聖武天皇の巻六・九七四番歌、

ますらをの行くとふ道ぞおほろかに思ひて行くな大丈夫の輩ますらを

について、『増訂萬葉集選釈』の「前の御製(引用注、九七三番歌)にも劣らず雄大な御歌ぶりである」(二〇六・二〇七頁)が、「莊重な御語調と相俟つて、まことにおごそかに拝誦せられる」(『萬葉集より』二五頁)に変えられている。

また、②「皇威」の賛美を加筆したところもある。大伴家持の巻二十・四五一四番歌、

青海原あまのうらかぜ波なびき往ゆくさ来きさつむことなく船は早けむについて、『増訂萬葉集選釈』が「『青海原風波なびき』の勁健な句の調が、海路の波濤を凌いで、遠く異国に出で立つ人の雄々しい別にふさはしい」(四六六頁)と述べるに止まるところを、「殊に『風波なびき』の勁健な句に、皇威の盛んなるをたたへた意気がこもつて居る。一首の高調、まことに遣外使節、送別の歌たるにふさはしい」(三一頁)と書き加えている。

以上は細部に表れた天皇讚美であるが、さらに、③戦争期に特別に尊重された天皇讚美の歌二首が、「評釈」に参考歌として埋め込まれている。これらの歌は『増訂萬葉集選釈』が採録し、それ自体として評釈しているものである。その一首は橘諸兄の巻十七・三九二番歌で、大伴家持の巻十七・三九二六番歌、

大宮の内にも外にも光るまでふれる白雪見れどあかぬかも

の「評釈」に全文引用された信網の既発表の文章「雪の日の肆宴」〔萬葉集百話〕明治書院、一九三七・五〕の中に登場する。

「…」終つて肆宴を賜ひ、雪の歌を賦すべき勅があつた。三代に奉仕した白髪の老臣橘諸兄は、まづ詔に応じて、「ふる雪のしろ髪まで到大君に仕へまつれば尊くもあるか」とうたひ、以下各その歌を奏した。「…」

〔統萬葉集より〕一八〇一九頁

諸兄の三九二二番歌は、尊皇の精神をあらわした歌として『国体の本義』〔文部省、一九三七・三〕に取り上げられ（三九〇四頁）、『愛国百人一首』にも選ばれた歌である。

もう一首は、家持の長歌「陸奥国に金を出だす詔書を賀く歌一首」〔卷十八、四〇九四〕に引かれた大伴氏の言立てである。

海ゆかば 水づくかばね 山行かば くさむすかばね 大君の へにこそ死なぬ かへりみはせじ

この言立ては、長歌の反歌である四〇九七番歌、

すめろぎの御代栄えむとあづまなる陸奥山に黄金花咲く

の「評釈」において、その制作事情を説明する中で言及される。

「…」家持は、当時越中守として任に北国にあつたが、その詔書（引用注、黄金出現を喜ぶ聖武天皇の詔）を拝読し、感激して長歌を詠じた。その中に大伴氏の祖先から歌ひ伝へた

ことだて
言立て、かの、「海ゆかば水づくかばね、山行かば草むすかばね…」も詠みいれてある。〔…〕〔統萬葉集より〕一九頁

戦争下に、身を捧げて天皇を守ることを誓った歌と解釈された言立ては、一九三七年に信時潔によって曲を得、太平洋戦争下の「国民」に強い影響力を持った。四〇九七番歌の制作事情については、聖武天皇の詔に応じたことを述べるだけで足り、言立てを引用する必要はない。しかし、「かの」という指示詞に示されているように、信網は言立てに特別な思い入れを持っており、その上、全文引用しなくとも当然知っている読者は自分に共感してくれるものと期待していたのであろう。このような形で二首の引用は、GHQによる検閲を免れるためのもので考えられる。

これに近いものとして、④戦争期に宣揚された「上代日本精神」に曖昧な形で言及しているところがある。家持の巻十九・四一六五番歌、

丈夫は名をし立つべし後の代に聞き継ぐ人も語りつぐがね
まつら
について、次のように記す（全文）。

大丈夫たる者は、須く名を立つべきである。後代にその名を聞きつぐ人が亦語り伝へて、永久に語りつきゆくやうに。

「勇士の名を振ふを慕ふ歌」といふ長歌の反歌。憶良の「このこやも空しかるべき萬代に語り継ぐべき名は立てずし

て」の歌に和したもの。

上代日本精神のよくあらはれた作である。

〔続萬葉集より〕二三頁

第二パラグラフまでは『増訂萬葉集選釈』とほぼ同文である。

『増訂萬葉集選釈』はこれに続けて「元來家持は、憶良の歌風を慕つてゐたので、この種の追和の作がこの外にもある」(四二〇頁)と述べるに止まる。第三パラグラフはあまりに簡潔で、なぜこの歌が「上代日本精神」を表しているのか、「上代日本精神」とは何であるかはわからない。

引用された山上憶良の卷六・九七八番歌は、「愛国百人一首」に採られている。四一六五番歌はこの憶良の歌とともに、戦争下に「萬葉精神」を象徴する歌とされていた。鴻巣盛広はこの二首とその他の類する歌に、『萬葉集』の時代における〈名を重んずる思想〉の熾烈さを見、それを無窮の尊重、悠久への継続と説明し、「吾が国家皇室に対する萬世無窮の信念」に結び付けた(『萬葉精神』日本精神叢書、教学局、一九三八・六)。また、武田祐吉も二首について、国家に忠誠を尽くして名を立てることと解説した(『萬葉精神』上巻、湯川弘文社、一九四三・七)。

「上代日本精神」もこのような意味と思われる。信綱はそれを具体的に説明せず、読者の暗黙の了解に委ねたのである。

ところが、逆に⑤「上代人の純忠の精神」を明言しているところが一箇所ある。信濃國の防人・小長谷部笠麻呂の卷二十・四四〇三番歌、

大君の命かしこみ青ぐむのとのびく山を越よて来ぬかむ
の「評釈」の第二パラグラフである。

「大君のみことかしこみ」は、上代臣民の忠誠の忱をあらはした句である。「…」同じ句を用ゐた歌が二十七首、中に、六人の防人の歌にあり、これがその一首である。東訛の多い、此の歌に此の句を用ゐてゐることは、上代人の純忠の精神をあらはしてをるものといふべきである。

〔続萬葉集より〕二九頁

この「評釈」の主眼は、「大君のみことかしこみ」という『萬葉集』の類型表現に「忠誠の忱」が表れていることを説明することにある。四四〇三番歌は『増訂萬葉集選釈』には採られていないが、戦争下の信綱と今井福治郎の共著『萬葉集防人歌の鑑賞』(有精堂出版部、一九四二・四)は、この類型表現を持つ防人歌の最初に取り上げており、信綱が特に重視していた歌と思われる。

『萬葉集防人歌の鑑賞』では「古人の純忠の精神」を賛美し、それが「事変」(日中戦争)では「大君の命のままに生命を捧げんとし、大君のお召のままに肉親の絆をきつて征かんとする大丈夫の精神」(八頁)として表れていると解説するが、『続萬葉集より』では、そのように敷衍することはない。その代わりに、この歌に「東訛の多い」ことを言う。方言が強く、意味の取りにくい、地方人特有の感情表現とも受け取れる防人歌を敢えて

選んで、「上代人の純忠の精神」を揚言したと考えられる。⁽⁵⁾

以上のように、『萬葉集より』『続萬葉集より』の「評釈」には、「序言」で明示されなかつた天皇への忠義心が見え隠れしている。それは、戦争期の〈尽忠報国〉を根幹とする「日本精神」との〈連続〉性のカモフラージュと見ることができ。信綱にとつて、天皇への忠義心は絶対に譲ることのできない『萬葉集』の核心部であつたのである。

七 〈文化史料〉という採歌基準

——「日本叢書」をめぐる——

『萬葉集より』『続萬葉集より』で、なぜ信綱は②「文化的現象を了解する資料」となる歌の採録に努めたのであろうか。信綱は研究の初期より、『萬葉集』と上代の彫刻・建築・法制などの文明との関連に強い関心を示していた。それは「上代国民の精神」をトータルに捉えるためであつた(和歌史の研究)第一編・第一章・二・上代文明と和歌、二一―二二頁、大日本学術協会、一九一五・二二)。また、「奈良朝文明の宝库」である『萬葉集』を当時の社会生活に関する貴重な資料とも見ていた(奈良朝文明の宝库)『萬葉漫筆』改造社、一九二七・八)。

しかし、『萬葉集より』『続萬葉集より』のように〈文化史料〉として『萬葉集』の歌を採録する方針を前面に打ち出し、『増訂萬葉集選釈』に採られず、決して「秀歌」とは言えない歌までも採録することは、戦争期以前にはなかつたことである。

この採歌方針の変化は、研究の当初からの信綱の関心が、『萬葉集より』『続萬葉集より』が属する「日本叢書」のシリーズとしての趣旨に刺激を受けたことによると思われる。

「日本叢書」の版元の生活社は、一九三七年(昭和十二)頃から、鷲沢与四二『支那開發の根本方策』(一九三七・五)、安藤徳器編『北支那文化便覧』(一九三八・一〇)、南洋協會編『南洋鉞産資源』(一九四〇・六)、住谷悦二『大東亜共榮圈植民論』(一九四〇・七)などを刊行し、植民地経営を中心に時代の動きに敏感に反応した出版社であつた。信綱との関わりでは、信綱の三男で歌人・国文学者の治綱の『永福門院』(一九四三・五)を出版している。

「日本叢書」の出版は、「終戦の詔書」宣布以前の一九四五年四月から始まつている(表)。同年七月十五日発行の⑤柳壮一『寒さと人間』の末尾の「追記」の日付が同年三月十五日であることから類推すると、四月二十日発行の④『霜柱と凍上』の原稿依頼は遅くとも一九四四年後半であつたと推測される(シリーズ番号を四角囲み数字で示す。以下同)。

太平洋戦争末期に物資が欠乏する中、生活社はコストを最小限に切り詰めた、効果の大きいシリーズとして「日本叢書」を企画し、生き残りを図つたのであろう。「日本叢書」は各冊三二頁。本文の分量の多寡を活字の大きさと行間で調整している。この三二頁というのは、B半裁一枚の表裏に印刷するだけで一冊ができるということである(図2)。

「日本叢書」は敗戦を挟む一九四五年四月から一九四七年六

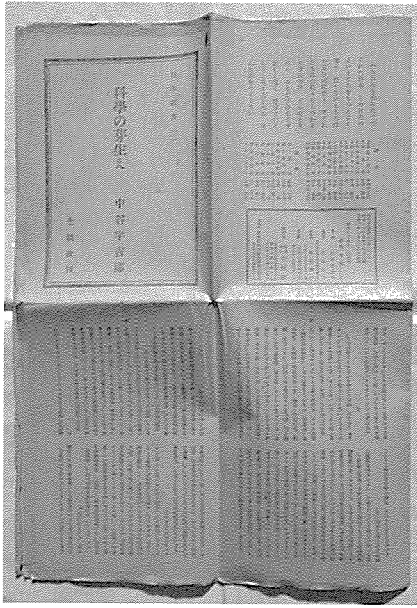


図 2

月までの間に、九七冊出版された。^⑧敗戦後も出版を継続できたのは、低コストであっただけでなく、自然科学・歴史（明治期）・文学を中心に、時局の影響を極端に受けない内容であったからである。

もちろん、戦争期出版の「日本叢書」の諸冊には、戦争末期の「国難」に対する危機意識が見られる。しかし、例えば、^④谷川徹三『雨ニモマケズ』の、

「……」今日の事態は、ともすると人を昂奮させます。併し、昂奮には今日の意味はないのであります。われわれに必要なのは昂奮ではなくて意志の堅持——持続的な意志の堅持

であります。「……」
（二二頁）
や、^⑨中谷宇吉郎『科学の芽生え』の、

斉彬公は、今日に劣らぬ国難に当つて、外に向つて何等大声疾呼することなく、静かに藩政を治め、科学工業を興し、勤皇の志を堅め、琉球を通じて我が国の世界的飛躍を策してゐたのである。
（二二頁）

という危機意識は、敗戦後の「国難」に対するものとして読み換え可能となっている。

そもそも戦争期に出版された「日本叢書」の裏表紙には、以下の趣旨が印刷されていた（^⑩高木卓『郡司成忠大尉』による。本により、スペースに異同がある）。

われわれを生き育ててくれた日本 この日本のよいところをもつとよく知り 良くないところはお互ひに反省し すぐれたものの数々をしつかりと身につけ どんなどきにも ゆるがずひるまず 大きく強く伸びて行く もととなり力となる そんな本をつくりたい

この趣旨は敗戦後に、「戦争期の「反省」あるいは「批判」、日本再建の標語に読み換えられ、一言の変更もなく「日本叢書」に印刷され続けた。

このように、戦争期と（連続）すると同時に、読み換えによって戦争期から（切断）された「日本叢書」の敗戦後の執筆者たちは急進的な変革に対しては、^⑪額原退蔵『明恵上人』が「自由と民主への放恣な利己的な解釈」を非難し（三〇頁）、^⑫中谷

宇吉郎『農業物理学雑誌』が米軍将校の「日本は今後瑞典のやうな美しい平和な国（引用注、農業国）として生くべきだ」という意見を、日本の面積と人口では実現不可能と退けたように（二七頁）、批判的スタンスをとった。

「日本叢書」のタイトル一覧（表）を見渡すと、シリーズの企画者は、伝統文化と西洋文化を抛り所にした穏健な「日本再建」を目指していたことが窺える。但し、マルクス主義者の平野義太郎の④『日本労働運動の序幕と展望』⑤『自由民権』や、農業関係の⑥寺尾博『農の理法』⑦尾崎喜八『麦刈の月』⑧中谷宇吉郎『農業物理学雑誌』⑨西岡虎之助『中世農民の経済的日常生活』も見えるように、敗戦後に急激に高まった労働運動・農民運動への関心の取り込みも図られている。

『萬葉集より』『統萬葉集より』に〈文化史料〉として採録されたと思われる歌を整理すると、二つの異なる方向性が浮かび上がる。その一つは、上代の貴族文化を伝える歌である（漢文学の受容／正倉院文書との関連／花喰い鳥のデザイン・肖像画に関わる歌／仏教思想・仏教儀礼・仏像などの仏教の受容／七夕の受容／言霊・玉簪などの信仰／時刻制度を示す歌／図書館の歴史を示す歌／袖付け衣など服飾に関わる歌／鷹狩の歌）。『日本叢書』の一つとして、信綱はこれらの歌を通して、「日本再建」の拠り所となる上代の、高い文化を示そうとしたのであろう。

もう一つは、経済状況・農業・工業・交通・服飾・食・呪術・娯楽・動物などについての生活文化を伝える歌である（貧窮／

新嘗／市・商規則／建築・墨繩／山道開墾・山中の旅・航海／肥人の服飾／食料品／雨乞い・迷信／温泉／犬・鶏・馬・牛。萬葉時代の官民の暮らしぶりを歌によって様々な角度から描き出している。先に述べたように、信綱は「奈良朝文明の宝庫」として、『萬葉集』を当時の社会生活に関する貴重な資料と見ていたが、また、労働に関わる歌も詠んでおり、特に戦後すぐの時期には、精悍な農夫の労働の姿を写真した次のような歌も作っている。

海の日^{たな}は直に照らせり二毛作まくと畑かへす裸身の農夫

「遠州行（二）」（「心の花」第50巻第10号、一九四六・二〇）

敗戦後、信綱は労働や生活への関心を深めたのであろう。『統萬葉集より』には「農業国なる吾が国」という発言もある（二一頁）。社会生活に関する歌を採録して、「祖先」の暮らしへの読者の関心に応え、それが戦後の暮らしと通ずることを示し、「心の糧、心のうるおい」とすることをめざしたと思われる。

〈文化史料〉としての『萬葉集』の歌を、「秀歌」に限らず採録することは、敗戦後の時代状況と「日本叢書」の趣旨に沿った萬葉集の再生・更新であった。

八 「新た世」の歴史観の問題点

以上に見てきたように、佐佐木信綱は、皇室、および皇室と国民の結び付きは再生・更新されながら永続する、という「新た世」の歴史観を支えに、戦争期から戦後へと時代を涉って行っ

た。日中戦争・太平洋戦争を、天皇を中心に新たなアジアが建設される「新た世」と見たのと同様に、敗戦後の「日本再建」も天皇を中心とする「新た世」と捉えた。

敗戦後最初に出版した「国文学」書『萬葉集より』『続萬葉集より』では、『萬葉集』の歌が、日本の国土とともに、過去から今の時代まで絶えることなく新しい感動を与えてきたことを説いた。敗戦後の読者は、『萬葉集』の歌に新たに感動することので、その永続する歴史に参入することになるのである。

なお、その際、予めGHQによる言論統制に備えて、『萬葉集より』『続萬葉集より』を、表面的には戦争期の〈尽忠愛國〉の萬葉観から〈切斷〉したように見せながら、実質的にはこれを〈連続〉させた。信綱にとっては、天皇への忠義心は『萬葉集』の核心部であり続けていたのである。

また、『萬葉集』の歌によって「祖先」が、高い文化を持ち、しかも今の時代の人々に通ずる生活を送っていたことを示して、「日本再建」の担い手となる人々の精神的支柱としようとした。信綱からすれば、天皇の治世も、天皇への忠義心を核心部とする『萬葉集』も、再生・更新されながら永続するものであり、敗戦はその一局面に過ぎず、必ず再生・更新が果たされるはずであった。

もちろん、信綱は「新た世」の歴史観を単純素朴に信じていたわけではない。一九五一年（昭和二十六）一月発行の『山と水と』の敗戦後すぐの時期の歌には、時代状況に対する激越なま

での「憤り」が繰り返し歌われている。「新た世」の歴史観を信じることで、その激情を昇華させたのであろう。

信綱の「新た世」の歴史観による、戦争期と戦後の確信犯的連結は、一見すると矢内原忠雄・津田左右吉・太宰治に見える戦後における天皇への敬愛の継続に似ている。しかし、矢内原らが主体的にそれを選んだのに対して、信綱の歴史観はどんなに強固なものであったとしても、あくまでも天皇の意思に従うものであった。

それゆえ、戦争を批判し、自分なりの論理でその原因を究明しようとした矢内原らとは異なり、信綱にはそのような視点はなかった。

一九四五年八月十五日に、「敗戦の詔書」を聞いた信綱は次の歌を詠んだ。

天を仰ぎ地にひれふし歎けどもなげけどもつきむ涙にはあ
らす
「熱海西山作」『山と水と』

痛切な〈歎き〉の率直な表明は、敗戦後多くの「国民」が口にした、〃仕方なく戦争を支持した〃という弁明に比べれば、自分自身に対して遙かに〈誠実〉である。しかし、この〈歎き〉は、最後まで勝利すると信じていた皇國の敗北に対するものである。そして、〈歎き〉は、この戦争が何であったかを問いかける回路を持たぬまま、「日本再建」、すなわち「新た世」実現のためのエネルギーに転化していったのである。

信網の「新た世」の歴史観は、不都合な情報を遠ざけ、戦時期と戦後の歴史的社会的条件の違いを無化し、意志決定を天皇に委ねたまま、その時々々に再生・更新の意欲を作り出すものであった。

注

- (1) 戦争期と戦後の（切断＝連続）は、坪井秀人（『国文学』）者の自己点検「イントロダクション」（『日本文学』第49巻第1号、二〇〇〇・一）が「国文学者」について問題提起した視点である。
- (2) 矢内原忠雄『日本精神と平和国家』岩波新書、岩波書店、一九四六・六、赤江達也『矢内原忠雄 戦争と知識人の使命』岩波新書、岩波書店、二〇一七。
- (3) 津田左右吉「建国の事情と萬世一系の思想」『世界』第4号、一九四六・四。この論文の刊行事情については、吉野源三郎「終戦直後の津田先生」（『職業としての編集者』岩波新書、一九八九、初出）『みすず』一九六七年四（六月号）参照。
- (4) 太宰治「十五年間」『文化展望』第1巻第1号、一九四六・四。なお、この小説については、『文化展望』の編集人・大西巨人の批評を含め、橋本あゆみ「雑誌『文化展望』にみる『過去への反逆』の拒絶——太宰治、坂口安吾、斎藤史らの寄稿における戦中・戦後の切断と連続」（第22回戦争と萬葉集研究会、二〇一九・一一・二九）に多くを教えられた。
- (5) 矢内原はナシヨナリズムの平和主義、津田は（歴史的事実）の尊重、太宰は政治・社会を揶揄する立ち位置において、戦争期・戦後を通じて一貫していた。
- (6) 藤村作「われらの主張」（『国文学解釈と鑑賞』第1巻第1号、一九三六・六、同「国家の前途」（『国語と国文学』第22巻第8号、一九四五・一一）など。
- (7) 小松（小川）靖彦「萬葉精神」をめぐる——戦争下の久松潜一・武田祐吉の萬葉論（戦争と萬葉集）上野誠・大浦誠士・村田右富実編『万葉をヨム 方法論の今とこれから』笠間書院、二〇一九。
- (8) 佐佐木幸綱「佐佐木信綱の人と仕事」『佐佐木信綱研究』第8号、二〇一七・六。
- (9) 『黎明』の「歌集黎明序」に、「昭和二十年八月十四日の詔書に、堪へ難キヲ堪へ忍ヒ難キヲ忍ヒ以テ萬世ノ為ニ太平ヲ開カムト欲ス、と宣らせ給へり。吾が臣民は、大詔を畏みまつりて、新たしき日の本の国を築き成さむ為に、道は険しくとも遠くとも、ひたすら邁進すべき時なり。／＼ここに此の小歌集を、新日本建設の為にいそしまむとする若人に贈る。」（三頁）とある。
- (10) 佐佐木幸綱「佐佐木信綱」九九頁、桜楓社、一九八二。
- (11) 大野道夫「短歌の社会学」Ⅱ一章「近代化の明治の歌人——愛づる明治の精神・佐佐木信綱、はる書房、一九九九、「戦争と信綱の戦争観」（注（8）誌）。
- (12) 信網の「明治の聖代に生を享くる」者としての意識については、小川（新姓小松、以下同）靖彦「校本萬葉集」の意義——佐佐木

信綱を取り巻く人々」(『佐佐木信綱研究』第七號、二〇一六・一二) 参照。

(13) 森本平「戦後歌集からみる佐佐木信綱の戦争観」(注(8)誌)。

(14) 佐佐木信綱「作歌八十二年」、一九四五年三月条(二九七頁)、同六月条(同)。

(15) ジョン・ソルト「北園克衛の詩と詩学意味のタペストリーを細断する」田口哲也監訳、第六章・ファシズムの流砂、思潮社、二〇一〇、同「平和な時代に振り返って鏡をのぞき込むと、後ろに小さく北園克衛像が見える」(第13回戦争と萬葉集研究会、二〇一八・三・二二。本誌所収)。

(16) 「年表」は完全を期した上で将来何らかの形で公開したい。なお、戦争期から戦後にかけての信綱の評価は、『佐佐木信綱全歌集』(ながらみ書房、二〇〇四)によってなされることが多い。しかし、同書所収の『黎明』は原版に大幅な改訂が加えられている。また、同書は『山と水と』(長谷川書房、一九五一・二)を収めるが、この歌集は戦争下の愛国短歌を最小限しか採録していない。

(17) 森本平は『佐佐木信綱全歌集』(注(16)書)に依拠して、信綱に戦時下で学問を守ろうとする姿を見、「戦争への意識の裏返しとしての平和への意識、戦争を含む世事に対する学問の優位性」の意識を読み取る(注(13)論文)。また、堀川信行は、戦時体制下に信綱が忠君愛国を教導するために『萬葉集』を『小学国語読本』の教材としたことを批判的に論じながら、「戦時体

制の中でも、信綱は『萬葉集』のよりよい本文の普及に力を注ぎ続けていた。そこには学問的な誠実さが溢れている」と言う(『国語教科書の『萬葉集』―佐佐木信綱をめぐる戦中・戦後―』『語文(日本大学)』第162輯、二〇一八・一二)。

(18) 「萬葉一千種解題」は一九四四年十月に脱稿(『心の花』第48巻第11号、一九四四・一一、佐佐木信綱「佐佐木信綱年譜」『佐佐木信綱文集』竹相会、一九五六・一(但しタイトルは「萬葉文献解題」)。原本の所在については情報を得ていない。なお、この解題は、佐佐木信綱『萬葉集事典』(平凡社、一九五六・六)の「典籍篇」の礎稿となったか。

(19) 一九四四年には、『定本萬葉集四』(武田祐吉と共編、一月)、『正訓萬葉集』(湯川弘文社、一月)、『歌謡の研究』(丸岡出版社、一月)、『伴林光平全集』(湯川弘文社、一月)、『萬葉集神事語彙』(今井福治郎と共著、有精堂出版部、二月)、『萬葉集の研究第二』(萬葉集古写本の研究)(岩波書店、三月)、『萬葉五十年』(八雲書店、六月)、『国文秘籍解説』(養徳社、十二月)と専ら学術書を出版している。他に『明治天皇御集謹解改訂版』(有朋堂、十月)。

(20) 一九四六年には、『靈元天皇乙夜隨筆』(大八洲出版、二月)、『萬葉集 西本願寺本一』(編著。古典文庫、六月)、『上代歌謡の研究』(人文書院、十月)の学術書、『萬葉集より』(生活社、四月)、『続萬葉集より』(生活社、六月)の評釈書の他、『萬葉辞典』(有朋堂)、『萬葉集選釈』(明治書院)、『心の花』第50巻第5号(五月)

による）、『萬葉讀本』（日本評論社）〔同第50巻第11号（十一月）による〕を再版し、『作者別勅撰和歌集』（文明社書店）の企画が決まる〔同50巻第5号（五月）による〕。『国文学』書以外では、『信綱三十六首選』（京洛複製刊行会、十二月）。

(21) 小川靖彦「願はくはわれ春風に身をなして―佐佐木信綱の萬葉学における『評釈』（『萬葉集選釈』と『新月』）―」（青山学院大学文学部紀要）第54号、二〇一三・三（a）、同「ゆるぎない（私）、やわらかな（私）―佐佐木信綱博士の萬葉学における研究主体―」（佐佐木信綱研究）第0號、二〇一三・六（b）、同「佐佐木信綱の萬葉学と短歌制作」（『短歌往来』25巻第11号、二〇一三・一〇）（c）で信綱の萬葉学を短歌制作と関わらせて論じることを試みた。

(22) 「愛国短歌」という用語は、今村冬三『幻影解「大東亜戦争」戦争に向き合わされた詩人たち』（葦書房、一九八九）の、戦争下では「戦争詩」（戦地における個別的体験を歌った詩）と「愛国詩」が明確に区別されていたという問題提起に基づく。

(23) 「出陣学徒におくる」歌を集成すると以下である。

【「心の花」】

ひむがしの大き大亜細亜の黎明に雄々しく立てる若人を見よ
大いなる歴史の中の一人としいゆく若人よ今ぞ此秋ぞ（朝日新聞・『作歌八十二年』に掲載）
続きいゆけ今の瞬間も海に陸に大き勝どきはあがりてあるを
（朝日新聞・『作歌八十二年』に掲載）

火ともよるますらを心あたの機も艦も軍もやきつくすべし（読売新聞に掲載）

大君の遠の御桶と雄々しかも学徒はい征く生死をこえて（読売新聞・『山と水と』・『作歌八十二年』に掲載）

【朝日新聞のみ】

御稜威のもと大き朝日のみ旗もとあたうちつくす神の軍なり
敵何ぞ我は正しき聖戦なり神は正しきを守らせたまふ
国の命かけて戦ふみ軍にい征く譽をたたへざらめや

【読売新聞のみ】

その気魄その□誠若き学徒にして敵のことごとく撃ち碎くべし

(24) 「黎明」の「若人に示す」と題された歌は以下の六首である。

新たしき日本の国をつくり成さむ一人一人ぞ雄々しく正しく
八十の曲路行き進まなぬばたまの夜空にも星の光はあるを
明治の御代興れりし時を思ひ見よ若人にして国を背おひき
進み動く世界の音を聴きとめつつすめら御国の大道をゆけ
新日本国の真柱築き立つる若人のうへに日はかがやけり
今あらたに興る皇国の黎明に雄々しく立たむ若人を見よ

『作歌八十二年』の一九四五年十一月条（三〇一頁）には「黎明」の巻頭に「若人に示す」を掲げたとして、二首目・三首目・四首目・六首目と、右に見えない三首の合計七首を挙げる。『佐佐木信綱全集』（注（16）書）では、『作歌八十二年』で落とした二首と新たな一首を加えた十首を「若人に示す」としている。

(25) 「新天世」の語は、信綱の歌では「奉頌大正天皇歌」(『豊旗雲』実業之日本社、一九二九・一。表記は「新天代」)、「萬葉室」は高松宮同妃兩殿下を迎へまつりて(『山と水と』。「萬葉室」は大和国史館の一室。一九四〇年十一月の作。表記は「あらた代」で皇紀二千六百年を言う)などにも例を見る。今後さらに精査したい。

(26) 小松(小川)靖彦「戦争下の歌人たちと『萬葉集』」『歌集新日本頌』を通じて(『戦争と萬葉集』(『青山語文』第47号、二〇一七・三)参照。

(27) 小松(小川)靖彦「浪漫主義」と『萬葉集』——中河與一『萬葉の精神』をめぐって(『戦争と萬葉集』——『繡』第29号、二〇一七・三)参照。但し、信綱は早い時期から、『萬葉集』を「世界文学史上の偉観」(『和歌史の研究』三二頁、大日本学術協会、一九一五・一二)、『萬葉集』の現存を「日本国の為に、否、世界の文学の為に、喜ぶべき極み」(『萬葉集なかりせば』『萬葉漫筆』改造社、一九二七・八)と捉えていた。

(28) 『萬葉読本』の当該箇所は①「萬葉集の価値」(『萬葉漫筆』(注(27)書)を基とする。また、②「萬葉集の価値」(『萬葉集百話』明治書院、一九三七・五)、③「萬葉集の尊さ」(『萬葉清話』靖文社、一九四二・五)は、『萬葉読本』の当該箇所を転用している。

①・②・③は日本民族を「現在最も活気ある民族」と言い、また、①・②・③は上に萬世一系の聖天子、下に敦厚な国民のある「国体」、また富士山とともに誇れるものとして『萬葉集』を挙げる。

葉集より」の「序言」の(民族性)や(國家意識)の主張は⑥・⑦に比べると穏やかである。

(29) 久松潜一「上代日本文学の研究」(序説・二・国文学を流れる三の精神、至文堂、一九二八・一二)など。久松の「国文学の精神」論については、安田敏朗「国文学の時空 久松潜一と日本文化」(三元社、二〇〇一)、小松(小川)注(7)論文参照。なお、富士谷御杖「真言弁」の「真心」を「まこと」とする久松に対して、信綱は「ひたぶる心」とする。「ひたぶる心」は賀茂真淵『歌意考』に由来する(「ひたぶるころ」『萬葉の心』明治書院、一九五六・一一)。

(30) 「序言」は「愛国百人一首」から例外的に一首を採録したことを断っている。その歌は大伴家持の卷十八・四〇九七番歌で、「評釈」の「附記」にこの歌がヨーロッパで最初に翻訳されたことを記す。それによってこの歌の世界性を示し、GHQによる検閲を免れようとしたか。

(31) なお、信綱はこのような主観的な評語を『国歌評釈』(人文社、一九〇三・五)以来「評釈」の方法としていた。小川注(21) a 論文参照。

(32) 大伴氏の言立ての表記は、『海ゆかばのすべて』(キングレコード、二〇〇五)解説書の見返しに拠る。

(33) 小松(小川)靖彦「大伴氏の言立て『海行かば』の成立と戦争下における受容——その表現および戦争短歌を通じて(『戦争と萬葉集』——『国語と国文学』第95巻第7号、二〇一八・七)な

と。

- (34) 日本文学報国会編『定本愛国百人一首解説』(毎日新聞社、一九四三・三)は、九七八番歌について、「名を尊び名をしむのは、是又日本古来の精神である。此の名は決して世間的名譽、功名といふやうに解すべきではあるまい」(三三三頁)と解説する。
- (35) なお、佐藤織衣による吉田裕久の調査(『戦後初期国語教科書史研究—墨ぬり・暫定・国定・検定—』風間書房、二〇〇二)の整理によれば、『中等国文二旧制中学用』で比較的方言吳の少ない「大君のみことかしこみ磯に触り海原わたる父母をおきて」(巻二十・四三二八)が墨塗りされている。但し、民間情報教育局による第二次墨塗り通牒の指示ではなく、教員の自主的墨塗りである(『国語教科書の萬葉歌における戦前と戦後の連続—自然の歌をめぐる—』『青山語文』第29号、二〇一九・三)。
- (36) 巻七・二二六四(市)、巻八・二五九四(仏教儀礼)、巻十一・二六四一(時刻制度)、巻十六・三三九五(漢文学の受容)、巻十六・三三九七(正倉院文書との関連)、巻十六・三八二九(食)、巻十八・四二二三(雨乞い)。
- (37) 文学者の著作に、保田與重郎『蒙疆』(一九三八・一二)、春山行夫『満洲風物誌』(一九四〇・一一)、同『台湾風物誌』(一九四二・七)などがある。
- (38) ㊦木村亀二『新文化と比較的精神』が、㊧川村太郎『ベニシリン』巻末の「既刊」に見えるが、出版を確認できない。
- (39) 「日鉄鉱業会社の西原技師長の談を聞きて詠める鉱山の歌録
- 四首」(黎明)。
- (40) 『万葉集と現代』『万葉集の心』明治書院、一九五六・一一。
『資料1』『萬葉集より』の「序言」(各パラグラフ冒頭の数字、白抜き数字は引用者)
- (1) 有史の世界を飾る文化国としては、夙く、埃及があり、希臘があり、印度があり、支那がある。わが日本国民は、それらの国々より遙におかれてはをるが、今より一千三百年乃至一千二百年以前に於いて、勝れた民族的文化を持ち、其の輝かしい記念塔を建てた。それが萬葉集である。萬葉集は、世界の文芸史の上にも、優秀な古典の一である。
- (2) 萬葉集は、速き上古以来、この国土にはぐくまれた純樸な民族が、支那印度等の文化を摂取して、成熟の期に達し、国家的に十分目覚めた時代の精神生活を、さながらに現はした記録といふべきである。それによつて吾々は、新興の氣力の盛んな上代国民の息づかひに触れ、その感情の至純、氣格の悠揚、知覚の穎敏、道義的觀念の敦厚、などを、血と肉とに於いて感ずることが出来るのである。
- (3) 萬葉以前の記紀の歌謡には、伝説の世界に属すべき作がありもするが、それに対して、萬葉は、その生活の歴史を自ら記し留めた人々の作品集であつて、例へば、人麻呂を、偶像化し、もしくは説話中の人物の如く考へる説は肯はれぬ。
- (4) 萬葉人は、そのひたぶる心から生れたところのまことを歌つた。まことは、萬葉精神の根幹である。まことの持つ力は強い。随つて、まことを以て一貫せる萬葉の歌は力づよい。その「まこと」こそは、

後の「みやび」、「物のあはれ」、「幽玄」、また、「あそび」、「さび」等に先立つて、吾が国文学史上に、不滅の光を放つてゐるのである。(5)萬葉集は、伝存せる最古の歌集であつて、また最新の歌集といひ得る。①それは集中の歌に、今日の吾々の魂を揺り、胸をうつものが多いからである。その永遠の生命ある、古くして新しい歌、及び

②文化史その他に特異の色彩反映を有してをり、当時の文化的現象を了解する資料たるべき作等を抜抄して今この小冊子を成したのである。(6)さき選ばれた愛国百人一首には、萬葉歌が二十三首の多きを占めてをる。それ等はいづれも集中の秀歌であるが、既に流布してをる故に、唯一首を採録するに留めた。その一首は、関連せる事実を述べむが為である。

(7)萬葉歌の価値は、長歌と短歌とが相半して有つてをる。然るにここには、短歌のみを選んだ。また、萬葉集に就いての、詳細な問題を説く紙数をも持たぬ。さういふ小冊子ではあるが、読者が一首一首をよく味読せば、萬葉集の短歌に就いては、自ら了解するところであらう。

(8)萬葉歌には、本文研究に、はた訓読に、解釈に、諸説があるが、専門的研究書でないから、それらに就いても多くを触れぬ。

(9)今や吾等は、新たなる日本を建設し、新たなる日本文化を創造すべく、一刻も忽せにすべからざる時に直面してゐる。祖国の為に正しき道に精進せむとする、純真なる青年少女諸子の心の糧として、はた新たに顧みらるべき古典の研究に志を發せる人の道しるべとし

て、この小冊子を贈ることは、半生を、萬葉学の研鑽に献げ來れる吾人の、喜とするところである。

【資料2】『統萬葉集より』の「序言」

萬葉集卷十七には、家持と池主との贈答が多く載せられてをるが、その中に、池主の歌の序に、山柿調泉の語が用ゐてある。柿本人麿や山上憶良の歌は家持の當時に於いて、已に源泉と仰がれてをつたのである。山柿のみならず、赤人や虫麿や、はた家持の作は数多あつまつてをる萬葉集二十卷は、又まさに調泉と称せらるべく、その後の歌壇に、常に新しい生命の力を灌いで來、今日の我々に尽きぬ興味を汲ましめてをる。この小著は、①その生命の力のあふれた歌を主とすると同時に、②特に文化史料としての多くをと心がけて選んだ為に、かの、「にきた津に船のりせむと」や、「石そそく垂水の上的さ厥の」のごとき秀歌にして、割愛しなければならぬものが少くなかつた。しかもなほ二冊に分つて、上冊の「萬葉集より」には卷九までを、この下冊には、卷十からを収めることとなつたのである。

【付記】本稿は第21回戦争と萬葉集研究会（二〇一九・一〇・二六）での研究発表に基づく。

（こまつ・やすひこ）青山学院大学教授

〔表〕「日本叢書」一覧

網掛けは1945年8月15日以前の日付、および佐佐木信綱の著作。頁数の「*」は表紙・本文共紙で見返しから本文が始まる。

番号	書名	著者	序文等日付	印刷	発行	部数	表紙	頁数	定価	発書(下線は引用者)	注記
1	霜柱と凍上	中谷宇吉郎			1945-04-20 1945-04-15 1945-08-20 (再版)	20,000	黒	*32	0.60	【本文】武蔵野の赤土に立つあの美しい可れんな霜柱の研究が、この大戦下の千島や北海道の飛行場を救ふ、【付録】「雪と戦争」	表紙,本文共紙,判型 積大 共同印刷株式会社
2	血液型	古畑極基			1945-04-20 1945-04-15 1945-08-20 (再版)	20,000	黒	*32	0.60	【本文】戦時のやうに大量の怪我人が出来て、それに輸血しなければならぬ時には甚だ大量の血液を必要とするが	表紙,本文共紙,判型 積大 昭文社印刷所
3	郡司成忠大尉	高木卓			1945-04-15 1945-04-20	20,000	黒	*32	0.50	【十九】昭和時代、古守島片岡啓の「郡司ヶ丘」の上には同期生、のちの首相齋藤英の策による「水鎮北陸」の記念碑が湖北の風のなかに毅然として立てゐる。	表紙,本文共紙,判型 積大 共同印刷株式会社
4	雨ニモマケズ	谷川徹三	1944-09-20講演		1945-06-15 1945-06-20	20,000	黒	*32	0.50	【内題副題】(宮澤賢治のこと) 【本文】今日の事態は、ともすると人を昂奮させます。併し、昂奮には今日の意味はないのであります。	表紙,本文共紙,判型 積大 凸版印刷株式会社
5	寒さと人間	柳壯一	1945-03-15		1945-07-10 1945-07-15	20,000	黒	*32	0.50	【追記】時局益々急迫を告げ、北迎亦多事ならんとする時、この小冊子が何等か啓蒙する所あらば望外の幸である。	表紙,本文共紙,判型 積大 明和印刷株式会社
6	すまひの伝統	岸田日出刀			1945-06-15 1945-06-10 1945-08-20 (再版)	20,000	黒	*32	0.60	【燃えぬ家】都市を燃えなくするといふことは、現代の都市がもつべき第一の要件であり、現代都市に課せられた至上命令でもある。	表紙,本文共紙,判型 積大 凸版印刷株式会社
7	芭蕉と紀行文	小宮豊隆			1945-08-15 1945-08-20	20,000	黒	*32	0.60	【七】芭蕉の仕事は、世界の「無常迅速」にも物はらず三百年後の今日といへども、なほ巍然として天下に登え立つてゐる。	表紙,本文共紙,判型 積大,カット:内田巖 株式会社秀英社
8	四季の気象	荒川秀俊			1945-07-20 1945-07-15 1945-10-10 (再版)	20,000 (再版)	黒	*32	0.60		表紙,本文共紙(再 版) 株式会社大倉印刷所
9	日月明(あかし)	亀井勝一郎			1945-07-15 1945-07-20	20,000	黒	*32	0.60	【第一の手紙】都心はたしかに廃墟です。しかしこの廃墟といふ感じには、陰惨なものは少しもありません。むしろひそやかな人を思はず微笑させるやうな希望が隠れてゐる。	表紙,本文共紙 株式会社秀英社
10	散り散らず	舟橋聖一	1945-07-23脱稿		1945-09-15 1945-09-20	20,000	黒	*32	0.60	【本文】勿論、少々の暴風は避けられるにしても、直撃弾では一たまりもなく飛ぶいのちを、平然として市井にさらす胆玉は、風流でなくて何であらう。/*小説	表紙,本文共紙 大日本印刷株式会社
11	桜田門外	田中英光			1945-09-25 1945-09-30	20,000	黒	*32	0.60	【本文】性格の美しいひとはやはり美しい歌を作るやうである。	表紙,本文共紙 明和印刷株式会社
12	科学の芽生え	中谷宇吉郎	1945-04-25		1945-09-15 1945-09-20	20,000	黒	*32	0.60	【内題副題】島津斉彬のこと 【一】斉彬公は、今日に勞らぬ困難の時に當つて、	表紙,本文共紙,未製 本判型積大 明和印刷株式会社
13	萬葉時代の社会と思想	阿部次郎	1945-06-10		1945-10-01 1945-10-05	20,000	黒	*32	0.60	【内題副題】萬葉集の背景1/*【英訳萬葉集】序論中、阿部執筆分の日本語原文	表紙,本文共紙 大日本印刷株式会社
14	萬葉人の生活	阿部次郎			1945-11-01 1945-11-05	70,000	黒	*32	0.60	【内題副題】萬葉集の背景2【章立て】一笑生活 二自然との交渉	表紙,本文共紙 大日本印刷株式会社
15	赤門懐古	入沢達吉	1928-05-17講演		1945-10-15 1945-10-20	20,000	黒	*32	0.60		表紙,本文共紙 大日本印刷株式会社
16	模範集	松枝茂夫	1944-01刊より抄		1945-10-15 1945-10-20	20,000	黒	*32	0.60	【解説】大事に於いては断じて模範でなかつたが、小事に於いてはあくまで模範であつた傳吉主の態度は、まことに今日の私達にとつて手本とするに足ると思ふ。/*都誌行著松枝茂夫訳隨筆	表紙,本文共紙 株式会社秀英社
17	独創について(座談)	緒方富雄,河上徹太郎,丘英通,伊原宇三郎,諸井三郎,渡辺惣	【科学思潮】 1942-07,08号再録		1945-11-10 1945-11-15	40,000	黒	*32	0.60	【はじめに】戦に敗れてからの一日、私はこの独創について話し合つた記録を読みかへして見た。今となつてみれば、また別のものがひしひしと感ぜられてくる。	表紙,本文共紙 共同印刷株式会社
18	茶の美学	谷川徹三	1944-11-12講演		1945-10-25 1945-10-30	20,000	黒	*32	0.60	【本文】茶を芸術として見る場合には、西洋風の芸術の体系の中には適当な入れ場所がありません。	表紙,本文共紙 明和印刷株式会社

19	若菜頌	柳内吉彦	1945-10-15	1945-10-20	70,000	黒	*32	0.60	【本文】若菜摘みの真義は決して食ふことにのみ存するのではない。これこそは我が国民独特の優雅な趣味の一つであつて、	表紙本文共紙	大日本印刷株式会社	
20	長安汲古	石田幹之助	1945-08-09-10 講話	1945-12-01	1945-12-05	20,000	黒	*32	0.60		表紙本文共紙 大日本印刷株式会社	
21	山荘記	野上弥生子		1945-11-05	1945-11-10	20,000	朱	32	0.80	【十一月十三日】特攻隊の手柄話や、さかんな攻撃ぶりの書きたてにも、私は注文がある。あんな大げさな形容詞や、詠歌や、空虚な飾らがり代りに、もつと素朴に、記述的に書いたら、読むものの心をほんたうに揺さぶるに違ひない。/*日記	カット：青山義雄	明和印刷株式会社
22	若き学徒に告ぐ	富塚清		1945-11-15	1945-11-20	30,000	朱	32	0.80	【(二)】過去の自分のあやまちの委しい検討や反省にかゝつて見給へ、がっかりして、物が手につかないなんてことは吹きとんちまふ。	カット：青山義雄	大日本印刷株式会社
23	若き女性に告ぐ	富塚清		1945-11-20	1945-11-25	20,000	朱	32	0.80	【四】でも、女もまた日本の今度の敗戦に大きな責任がある	カット：青山義雄	凸版印刷株式会社
24	寸歩抄	川田順	1945-10	1945-11-25	1945-11-30	50,000	朱	32	0.80	【作品】国初めての凄歌(さむ)き秋も、/十五夜の月、まどかなるかな。/*詩歌集	カット：津田青楓	王子印刷有限公司
25	山嶺の気	堀口大学		1945-11-25	1945-11-30	50,000	朱	32	0.80	*詩集	カット：高島達四郎	凸版印刷株式会社
26	山ざと集	室生犀星		1946-02-15	1946-02-20	20,000	朱	32	1.50	【作品】三十年の昔よりも/もつと仕事をつづけようとするひとよ/その人はふたたび生かされるであらう/どういふ時代でも/その人に不名誉などは受けないであらう。/*詩文集	カット：津田青楓 裏表紙赤罨	大日本印刷株式会社
27	鎌倉文化	呉文炳		1946-02-15	1946-02-20	20,000	朱	32	1.50	【本文】昭和の今日吾々をして在りし往時の榮華を偲ばしめるに充分である。	カット：鍋井克之	大日本印刷株式会社
28	菅原道真	上司小剣		1946-02-15	1946-02-20	20,000	朱	32	1.50	*小説	カット：津田青楓 裏表紙赤罨	大日本印刷株式会社
29	抒情詩抄	西条八十		1945-12-05	1945-12-10	70,000	朱	32	0.80	【目次】疎間詩篇、我娘とねむる、水に寄す、君死にたまふことなかれ、羽根旅愁	カット：津田青楓	王子印刷有限公司
30	ざりしあひの小説	呉茂一		1945-12-25	1945-12-30	50,000	朱	32	0.80		カット：中西利雄	凸版印刷株式会社
31	日本文化発展のかたちについて	木村嘉衛	1945-10-25	1945-12-25	1945-12-30	70,000	朱	32	0.80	【五】ここに述べられた分析は単に観想的回頭的な関心からなされたのではなく、再建日本の努力に対する実践的意義を担ふべき一つの準備として企てられたのである。	カット：小糸源太郎 裏表紙赤罨	明和印刷株式会社
32	愛国心について	田中美知太郎	数年前の旧稿	1946-03-15	1946-03-20	20,000	朱	32	1.50	【目次】愛国心について—ソクラテスの場合—批評的精神と公共的精神 【はしがき】生活社がこの原稿を公にすることを企画した時も、かへつて切迫した空気がなほ一層人心を暗くしてゐるやうな時代であつた。	カット：本郷新	凸版印刷株式会社
33	綾山荘記	野上弥生子		1946-02-15	1946-02-30	20,000	朱	32	1.50	【三月三日】かうした矛盾に一般大衆が気がつかず、この種の低俗な表現が彼らの胸にびつたりするのが、確實為を失ふ以上に私には歎かばしい気がする。	カット：津田青楓	大日本印刷株式会社
34	明治回顧	大畑伸	1945-11明治節	1946-02-20	1946-02-25	20,000	朱	32	1.50	【八】我等は半成であつた明治の建設を更に拡大強化せしめて眞の国家再生に精進しなければならぬ。	カット：本郷新 裏表紙赤罨	塚田印刷所
35	浮世絵全盛時代	高橋誠一郎		1946-01-10	1946-01-15	20,000	朱	32	0.80		カット：鍋井克之 裏表紙赤罨	塚田印刷所
36	これやこの	久保田万太郎	1945-10	1946-03-10	1946-03-15	20,000	朱	32	1.50	*句集とその自注	カット：鍋井克之	凸版印刷株式会社
37	世界民の立場から	恒藤恭	1945-12-15 【改造】1921-6月号再録	1946-04-20	1946-04-25	15,000	朱	32	2.00		カット：高島達四郎 裏表紙二色罨	帝国印刷株式会社
38	夢日記	藤森成吉		1946-02-15	1946-02-20	10,000	朱	32	2.00	【内題副題】(野村東泉尼)/*小説	カット：内田巖 定価貼り紙	大日本印刷株式会社
39	女性新調	大森洪太		1946-02-15	1946-02-20	20,000	朱	32	1.50	【第一章】清き女性の更に清く、平和日本の再生の魁たらむことを期待	カット：藤田嗣治	凸版印刷株式会社

40	読書について	谷川徹三	1946-01-20	1946-01-25	20,000	朱	32	1.50	【本文】読書は今日に於いてこの古典を中心とすべきであると私 【本文】戦時下に於て人々は「不可能を可能にせよ」と叫んだ。之 【三】日本人も相当すぐれて精力的であつたことは明治以後の隆盛 を創り出したことでも証明されるであらう。[...] 悲運に逢つた日 本人は従来の態度を改め、悔惜し、平和の国として再生せんとして ゐる。日本人は他国民の情態を期待せず、忍耐努力の生活によつて あらゆる困苦に打ち克つたとしてゐる。	カット：本郷新 裏表紙赤算。	明和印刷株式会社	
41	農の理法	寺尾博	1945-11-03稿	1946-04-20	1946-04-25	20,000	朱	32	1.50	【本文】戦時下に於て人々は「不可能を可能にせよ」と叫んだ。之 は大衆を鼓舞するに適したものであつたらう。併し冷静なる科学は 反対に「可能を不可能にするな」と指示する。	カット：本郷新	凸版印刷株式会社
42	ウェルズと世界主義	土居光知		1946-03-05	1946-03-10	20,000	朱	32	1.50	【二】日本国民は、正しき真実を語る歴史知識によつて静かに反省し、 慙々しく再建の志みを続けるに相違ない。	カット：小糸源太郎 裏表紙赤算。	凸版印刷株式会社
43	始皇帝其他	加藤繁		1946-03-05	1946-03-10	20,000	朱	32	1.50	【二】日本国民は、正しき真実を語る歴史知識によつて静かに反省し、 慙々しく再建の志みを続けるに相違ない。	カット：小糸源太郎 裏表紙赤算。	凸版印刷株式会社
44	歴史を学ぶ	原随園		1946-06-20	1946-06-25	20,000	朱	32	1.50	【批判的思維と建設的思維 制度としての思想】今日のやうに新しい 体制をわれわれが自ら生まなければならぬ時代になると、	カット：津田青楓 裏表紙赤算。	株式会社大倉印刷所
45	考へるといふこと	谷川徹三		1946-03-05	1946-03-10	20,000	朱	32	1.50	【序言】今や吾等は、新たな日本を建設し、新たな日本文化を 創造すべく、	カット：小糸源太郎 裏表紙赤算。	明和印刷株式会社
46	日本労働運動の序 幕と展望	平野義太郎		1946-03-15	1946-03-20	20,000	朱	32	2.00		カット：高島達四郎 定価貼り紙。	明和印刷株式会社
47	鏡花緑の話	松枝茂夫		1946-04-10	1946-04-15	20,000	朱	32	1.50	【内題副題】(異国巡りの小説) *紀行小説紹介	カット：見島善三郎	帝国印刷株式会社
48	ざくろの話	桑原武夫		1946-04-25	1946-04-30	20,000	朱	32	1.50	*エッセイ集	カット：見島善三郎	東光印刷株式会社
49	萬葉集より	佐佐木信綱		1946-04-01	1946-04-05	20,000	朱	32	1.50	【序言】今や吾等は、新たな日本を建設し、新たな日本文化を 創造すべく、	カット：見島善三郎	塚田印刷所
50	麦刈の月	尾崎喜八		1946-04-10	1946-04-15	20,000	朱	32	1.50	【麦刈の月】日本中の麦畑といふ麦畑に勇ましい利鎌の音がしや うしやうと鳴り響き、*エッセイ集	カット：見島善三郎	王子印刷有限公司
51	日本の英学	福原麟太郎		1946-04-10	1946-04-15	20,000	朱	32	1.50	【五】これは、英学を又民衆の間へ展すことであつた。	カット：中西利雄	東光印刷株式会社
52	バスカルの親人 間	後藤康雄		1946-03-20	1946-03-25	20,000	朱	32	1.50	【結語】対米英戦争が始ると、「神がかり」思想が跳梁するに至り、 すべて「西洋的なもの」に鉄槌を揮つて弾圧を加へた。[...] 今 次の大戦を契機として、日本人は最も滑稽な思想的矛盾を地球上に 演じて、端なくもバスカルの断定を如実に証明したのである。	カット：藤田嗣治	東光印刷株式会社
53	間ヶ原夜話	尾崎士郎		1946-05-05	1946-05-10	20,000	朱	32	1.50		カット：見島善三郎	大日本印刷株式会社
54	明恵上人	額原退蔵	1945-12-20	1946-03-15	1946-03-20	20,000	朱	32	1.50	【本文】その自覚の中から、平和と正義を愛する新しい日本の姿が、 力強く生れて来ねばならないのである。しかも我々が目前に見る世 の粗どうであらう。自由と民主への放恣な利己的な解釈、都会と農 村との互に同情のない対立、私利を追ふに汲々たる間の横行、	カット：見島善三郎	鉄道弘済会印刷所
55	姉おとうと	丹羽文雄		1946-05-15	1946-05-20	20,000	朱	32	1.50	*小説	カット：藤田嗣治	大日本印刷株式会社
56	日本歴史の新しい 考へ方	佐野学		1946-04-01	1946-04-05	20,000	朱	32	1.50	【第四章】私は天皇が [...] 人民権力の代行機関として改革される ことの可能を信じ、その意味において天皇制の保持を主張する。 【三】一つの国民が科学技術の生み出す巨大な物理力をも保持し、し かも、なほ、その国の歴史的伝統によつて育まれた幾多の美しい文 化的要素を失はずにあらざれば、それはさらに素晴らしい ことではないであらうか。	カット：小糸源太郎	東光印刷株式会社
57	科学的精神	三宅泰雄		1946-05-01	1946-05-05	20,000	朱	32	1.50	【内題副題】一マラルメの創作態度及び過程一	カット：中西利雄	東光印刷株式会社
58	詩の誕生	鈴木信太郎		1946-05-01	1946-05-05	20,000	朱	32	1.50	【内題副題】人物・学識及び思想 【一】国歩艱難にして偉人を思ふ こと切なのは、我々の此頃である。【四】若夫時局の変転によつて、 にはかに彼を説くを憚り、又は埋没せしめる如きは、決して新日本の 文化的創造に参与する所以でない。	カット：川口敏外	東光印刷株式会社
59	平田篤胤	村岡典嗣	1945-11-19旧稿 整理	1946-05-25	1946-05-30	20,000	朱	32	1.50	【内題副題】人物・学識及び思想 【一】国歩艱難にして偉人を思ふ こと切なのは、我々の此頃である。【四】若夫時局の変転によつて、 にはかに彼を説くを憚り、又は埋没せしめる如きは、決して新日本の 文化的創造に参与する所以でない。	カット：高島達四郎	東光印刷株式会社

60	西洋文化の三原理	山内得立		1946-06-10	1946-06-15	20,000	朱	32	1.50	【五】 東洋と西洋との文化の戦ひであつた太平洋戦争は遂に東洋の惨敗に終つた、	カット：高島達四郎	凸版印刷株式会社
61	太郎冠者行状	野上豊一郎		1946-05-05	1946-05-10	20,000	朱	32	1.50		カット：津田青楓	凸版印刷株式会社
62	演劇芸術	太宰純門		1946-05-10	1946-05-15	20,000	朱	32	1.50		カット：児島善三郎	凸版印刷株式会社
63	農業物理学雑話	中谷宇吉郎	1945-12	1946-08-05	1946-08-10	15,000	朱	32	2.00	【一二】 再建日本の理想として増興を挙げることは、寧ろ良すぎる例としなければならぬであらう。しかし此の理想は、その実現が極めて困難であることをよく認識しておかなければならない。	カット：鍋井克之 裏表紙ニ定価。	東光印刷株式会社
64	梅園から談恋へ	長寿吉		1946-08-10	1946-08-15	10,000	朱	32	2.00		カット：津田青楓 裏表紙ニ定価。	青山印刷所
65	自由民権	平野義太郎		(1946-08-10	1946-08-15	10,000	朱	32	2.00)	【序】 民主主義日本の建設が、われわれの当面の課題となつてゐる。*誤つて64の裏付を印刷。	カット：高島達四郎 裏表紙ニ定価。	青山印刷所
66	科学の道	向坂逸郎		1946-08-20	1946-08-25	10,000	朱	32	2.00	【内題副題】 —高野長英のこと— 【一】 我々は我国文化の発達によつて人類文化に寄与しなければならぬ。我々は芸術と科学とを以つて世界文化の発展に貢献したい。	カット：児島善三郎 裏表紙ニ定価。	明和印刷株式会社
67	野ざらしの夢	蒲原右明		1946-06-15	1946-06-20	10,000	朱	32	2.00	*随筆	カット：鍋井克之 裏表紙ニ定価。	明和印刷株式会社
68	続萬葉集より	佐佐木信綱		1946-06-10	1946-06-15	20,000	朱	32	1.50		カット：津田青楓	塚田印刷所
69	函空のひとりごと	中川紀元	1945-12・11欄筆	1946-09-25	1946-09-30	20,000	朱	32	2.00	【本文】 私は竟に戦争画といふものを一点も描かずに終つたが、かといつてこれを進んで描いた人たちを非難する気持はない。只あのやうなものが戦争下の国民を鼓舞する力を持つと信じた画家たちばかり利口だつたとは思へないだけである。	カット：中川紀元 もと1.50円、貼り紙	鉄道弘済会印刷工場
70	草茅記	和田博		1946-06-01	1946-06-05	20,000	朱	32	2.00	*農業についてのエッセイ	カット：津田青楓 裏表紙ニ定価。	帝國印刷株式会社
71	染色体を見る人の話	大町文衛		1946-06-01	1946-06-05	20,000	朱	32	2.00		カット：中西利雄 裏表紙ニ定価。	帝國印刷株式会社
72	仏蘭西写真主義	木野亮		1946-08-01	1946-08-05	20,000	朱	32	2.00	【内題副題】 —ハルザック・フローベール・ゾラー	カット：中西利雄 裏表紙ニ定価。	東光印刷株式会社
73	言論の自由について	田中美知太郎		1946-07-05	1946-07-10	20,000	朱	32	2.00	【本文】 いはゆる国論の統一の如きは、国民の判断力を麻痺させ、視野を狭小にし、国策をあやまり、国を亡ぼすものにもなるのである。	カット：中西利雄 裏表紙ニ定価。	明和印刷株式会社
74	島の地理物語	辻村太郎		1946-07-05	1946-07-10	10,000	朱	32	2.00		カット：高島達四郎 裏表紙ニ定価。	東光印刷株式会社
75	賢者と政治	関根秀雄		1946-08-20	1946-08-25	10,000	朱	32	2.00	【内題副題】 —モンテーニュの政治論— 【冒頭部】 我々日本人が「朝々としても全体としても」名誉を損ふことなく、立派に此難局を突破することに、努めようではないか。	カット：中西利雄 裏表紙ニ定価。	東光印刷株式会社
76	日本の山	田部重治		1946-08-20	1946-08-25	10,000	朱	32	2.00		カット：鍋井克之 裏表紙ニ定価。	塚田印刷所
77	魚族の生態	楡山義夫		1946-09-05	1946-09-10	10,000	朱	32	2.00		カット：小糸源太郎 裏表紙ニ定価。	塚田印刷所
78	音楽と思想	諸井三郎		1946-08-25	1946-08-30	10,000	朱	32	2.00	【はしがき】 現在あらゆる論者が民主主義日本の建設について論じて居るが、民主主義の根源的思想であるヒューマンイズム其物が、ルネッサンスの精神さへ完全に体験して居ない吾々に充分把握されて居るとは考へられないのである。	カット：中西利雄 裏表紙ニ定価。	塚田印刷所
79	近松の人間愛	重友毅		1946-08-25	1946-08-30	10,000	朱	32	2.00		カット：鍋井克之 裏表紙ニ定価。	王子印刷株式会社

80	分離性性格	戸川行男	1946-08-25	1946-08-30	10,000	朱	32	2.00	【内題副題】—性格の心理学—	カット：高富達四郎 裏表紙ニ定価。	東光印刷株式会社	
81	私の留学時代	姉崎正治	1946-10-01	1946-10-05	10,000	朱	32	2.00		カット：鍋井克之 裏表紙ニ定価。	帝国印刷株式会社	
82	億良の悲劇	森本治吉	1946-09-10	1946-09-15	10,000	朱	32	2.00	【十】今昭和二十年秋、日本の現実には余りに重く暗きが故に、ややもすれば吾等は、人格の尊貴を見失ひ、誠実・慈愛・勇氣の存在さへ忘れようとする。正に文化の危機である。だが俄や寒気が白い歯をむいて脅迫してゐるだけに、尚更教養や思索は尊重されなくてはならぬ。	カット：鍋井克之 裏表紙ニ定価。	大日本印刷株式会社	
83	仁童日記抄	中村幸彦	1946-09-20	1946-09-25	10,000	朱	32	2.00		カット：小糸源太郎 裏表紙ニ定価。	大日本印刷株式会社	
84	温故知新	大塚弥之助	1946-09-01	1946-09-05	10,000	朱	32	2.00	*日本の地質について解説	カット：井鍋克之(ママ) 裏表紙ニ定価。	帝国印刷株式会社	
85	バルザックの魅惑	水野亮	1947-06-10	1947-06-15	10,000	朱	32	2.00		カット：川口軌外 裏表紙ニ定価。	共同印刷株式会社	
86	海と空	宇田道隆	1947-06-10	1947-06-15	10,000	朱	32	2.00	*海洋の気象について解説	カット：高富達四郎 裏表紙ニ定価。	共同印刷株式会社	
87	トーマス・ハックスリ小伝	永野為武	1945-11-28脱稿	1947-02-01	1947-02-05	10,000	朱	32	2.00	【はしがき】 <u>新しく生れ出づる日本</u> にとつて、必ずや、人間トーマス・ハックスリから学びとるものが多々あることを更めて見出されるにちがひあるまい。	カット：小糸源太郎 裏表紙ニ定価。	鉄道弘済会印刷所
88	新文化と比較的精神	木村亀二										
89	便利主義と能率主義	宮城音五郎	1946-11-01	1946-11-05	10,000	朱	32	2.00	【一四】今後吾国は軍閥政治や官僚政治から一躍して民主政治になることになるのであるから、この際國民はよくこのことを諒解して、今までのやうな非科学的非能率的な考へ方を止め、萬事科学的に物を考へるやうに訓練することが大切である。	カット：内田巖 裏表紙ニ定価。	大日本印刷株式会社	
90	歌迦	金倉円照	1946-10-15	1946-10-20	10,000	朱	32	2.00		カット：見島善三郎 裏表紙ニ定価。	東光印刷株式会社	
91	竹藪道の話	谷信一	1946-10-20	1946-10-25	10,000	朱	32	2.00		カット：高富達四郎 裏表紙ニ定価。	東光印刷株式会社	
92	雑感性の科学	服部静夫	1946-10-25	1946-10-30	10,000	朱	32	2.00		裏表紙ニ定価。	塚田印刷所	
93	ペニシリン	川村太郎	1946.11.25	1946-11-30	10,000	朱	32	2.00	【四】終戦を機会に戦争のため逆行したスルホンアミド治療とが相携へて再出発し軽歯補車の緊密な関係を以て発展し、七千萬同胞が皆其恩恵に浴し得る時代の日も早く来ることを念じつ筆を翻く。	カット：中西利雄 裏表紙ニ定価。	東光印刷株式会社	
94	向井去来	荻原井泉水	1946-11-20	1946-11-25	10,000	朱	32	2.00		カット：鍋井克之 裏表紙ニ定価。	大日本印刷株式会社	
95	香と芸術	早川甚三	1946-11-20	1946-11-25	10,000	朱	32	2.00		カット：見島善三郎 裏表紙ニ定価。	塚田印刷所	
96	音と芸術	田口湖三郎	1946-11-25	1946-11-30	10,000	朱	32	2.00	【音楽の陥落と発展】非音楽といふ言葉があります。[...] 丁度これはある人々が気に入らぬ人を人非人とか非国民と呼んだのと同じであります。	カット：小糸源太郎 裏表紙ニ定価。	帝国印刷株式会社	
97	野村万歳問書	古川久	1946-11-25	1946-11-30	10,000	朱	32	2.00	*雑誌「改造」に筆録連載した野村万歳の芸談を抄出	カット：鍋井克之 裏表紙ニ定価。	帝国印刷株式会社	
98	中世農民の経済的日常生活	西岡虎之助	1946-5-26	1946-11-25	1946-11-30	10,000	朱	32	2.00		カット：鍋井克之 裏表紙ニ定価。	帝国印刷株式会社